

雅俗文庫蔵『着飾之由来』翻刻と解題：付内閣文庫蔵『天保雑記』 「万国渡来怪物」

村上，義明
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1909520>

出版情報：文献探究. 55, pp.1-4, 2017-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



雅俗文庫蔵『着飾之由来』翻刻と解題

付内閣文庫蔵『天保雜記』「万国渡来怪物」

一 解題

本稿は『文献探究』第五十五号（本号）口絵に紹介した、九州大学附属図書館雅俗文庫蔵『着飾之由来』の翻刻である。参考として国立公文書館内閣文庫蔵『天保雜記』全五十六冊のうち第二十一冊に収録される「万国渡来怪物」の翻刻も載せている。

けだもの「着飾」について記された『着飾之由来』は、雅俗文庫本以外には伝本未詳で、後述する書誌情報以外に著者や絵師等を知ることとはできない。雑書の豊富さがその特徴の一つである雅俗文庫ならではの一本といえる。

奢侈にふける人々を模した「着飾」が享保・寛政ころに厳しく追い払われた後、しばらくは人目につかなかつたと記されることから、各時期の改革が旨とした「質素儉約」が意識されたものであることは容易に想像できる。

本書の正確な成立年も不明であるが、『天保雜記』に関しては、国立公文書館公式ツイッター (@JPNatArchives) に、

『天保雜記』の著者藤川整斎が「着飾」の記事を書きとめたのは、幕府が贅沢を厳重に取り締まった天保改革の頃。この絵には、奢

侈に流れがちな江戸の消費生活と、頭ごなしにこれを取り締まろうとする幕府の政策を合わせて笑い飛ばす痛烈な風刺精神が含まれているのかも？¹

とも記されるように、天保の改革によって三度質素儉約がとなえられようとしている時期の都市に暮らす人々の実態を見立てたものであることから、天保の改革の直前に成立したものと推測することができる。なお「着飾」の流行した時期については、『着飾之由来』には「天保中」とある（該当箇所『天保雜記』には「当時」とあり）。

『着飾之由来』と『天保雜記』の本文を比べると、本号口絵（二）に挙げた『天保雜記』の図像にある記述が、『着飾之由来』には見られないということ以外に、内容に関して大きな違いはない。図像に関しては、口絵を見れば明らかのように、その違いは甚だしい。

また、「素より三国伝来にして世界万国に渡る」として天竺、唐土に次いで阿蘭陀が記され、さらに各地によって呼称が異なるあたり、当時の人々の世界観がうかがえるようで面白い。

このけだものがどのように人口に膾炙し、記されたのか、この他の「着飾」を発掘するほかに知る手立てはない。

村上 義明

以下に『着飾之由来』と『天保雑記』第二十一冊の書誌を挙げる。
なお『天保雑記』の「万国渡来怪物」という見出しは、その目録による（「二四（朱） 一 万国渡来怪物」とあり）。

■『着飾之由来』書誌

所蔵 九州大学附属図書館雅俗文庫（57-G-13）。
巻冊 一冊。
刊写 写。
書型 中本。縦十九、五糎×横十三、九糎。
表紙 原装白色無地表紙。
外題 中央打付墨書「着飾之由来」。
見返 「着飾」の肉筆画あり。本号口絵（一）。
構成 本文三丁。
備考 仮綴じ。

■『天保雑記』第二十一冊（全五十六冊）書誌

所蔵 国立公文書館内閣文庫（150-0150）。
巻冊 一冊（全五十六冊のうち第二十一冊）。
刊写 写。
書型 半紙本。縦二十三、六糎×横十六、六糎。
表紙 白地に黄土色格子模様刷付。
題籤 左肩子持粹題籤（刷）に墨書「天保雑記 二十一」。
目録 冒頭に「天保七申年」と墨書。
構成 目録三丁、本文五十六丁。
備考 地に「天保雑記二十」とあり。本文左肩に丁付あり。

凡例

- 一、適宜、句読点等を付した。
- 一、字体は通行のものに改めた。
- 一、「而」「方」は仮名に開いた。
- 一、量字は「ト」「タ」「ク」で表した。
- 一、不審箇所には右脇に（ママ）を付した。
- 一、丁うつりは、「（丁数・オ／ウ）で表した。また『天保雑記』にかんしては丁付に従った。

二 『着飾之由来』（雅俗文庫）

抑此毛だものは、昔身代仕もつれの国、内庄から国より、ちとおごらん海を経て、花美国、僭上国に押移り、分限不相応国えはびこり、国中の人民家毎に是を愛する事甚敷、素より人に馴安く、次第に増長して終に破滅へ至る。恐しき毛ものなれば、召得るよりは是を追払ふ事度々にて、去る享保・寛政のころ、敵敷追払ひ、しばし隠るゝといへども、いつとなし（一・オ）に出きたりて、今天保中、又国中に充^{ママ}ます。依て此度またく駈いだして、其性体を見る事図のごとし。但し未だ名を知るものなし。諸書をせんさくするに、素より三国伝来にして

世界万国に渡るゆへ、所々にて名の違あり。

天竺にては美々獅子、又宇都久獅子^共言。

唐土にては全贅蛇、又五発通蛇、

又破利過蛇^共言。 「(1・ウ)

阿蘭陀にてはユスルキ、又ハデスギ、又オゴルキ^共言。

日本にては着飾といふたわ毛ものなり。

形は人に似て人にあらず。頭に甲あり、鼈甲

とも、けつこう共いふ。又金銀の如く、珠玉の如く、

後光の如く光りかゞやき、身に綾羅錦繡

をまとひ、雄は赤毛なし。雌はくびすぢ、衿元

脇下、腰より下、惣て赤毛多く、緋縮緬の如く、

又紫色もあり。其余五色、六色別れて甚だ 「(2・オ)

賤しき姿なり。雌雄ともつら別て大きく、目は

上に付、常に下を見ず、又向ふを見ず、兎角に

ない袖を振たがり、やせがほを張、十分に手を

広げ、耳をふさぎて人の言葉を聞かず、やみ

雲に乗りて有頂天に登る。高慢の鼻高く、

口には常に美味を喰ふといへども、あくことしらず。

常々太平楽を謡ひ、舌長く、或は舌式枚有。

まけおしみ強く、人より上を行ことを好み、節前 「(2・ウ)

に成て泣声うるさし。元来腹なく、胸せまく、

けつふとし。腰ふな／＼にて逃足早し。雌

の足黒く、下駄金^ゴ則のごとく、赤きあり、黒き

あり、天鷲絨毛の如く、償^ツ上国にては香花、茶

の湯、謡、舞等の遊芸に家業を怠り、道楽

国にては朝寐、昼寐を好み、酒色にふけり、

昼夜わかちなし。かりそめにも尾を見せず、

増長して身を亡す時になりて尾をいだす。 「(3・オ)

牛房の如し。又龍の尾の如くにて剣なし。

是を龍劍無といふ。たま／＼けん有は不入なり。

是を名附て不龍けんといふ。 「(3・ウ)

三 『天保雜記』 「万国渡来怪物」 (内閣文庫)

万国より渡る着飾と云けだもの、前の物を代^{シロ}

物又道具といふ。大そうにはり込

りつばなり。もやう蒔絵也。一が

いに定めがたし。金は先達て

上へつり上り、いまだ見へず。 「(24・オ)

抑此けだものは、昔自代仕^{シシヤン}もつれの国より、内症

から国より、ちとおごらんかいを経て、花美国、僭上^{セシヤミ}

国に押渡り、分限不相応国よりはびこり、国中人民

家毎にこれを愛する事甚し。元より能く人に

なれ安く、次第に増長して終に身上はめつに至る。

誠に恐ろしきけだものなれば、これは追払ふ

事度々にて、去る享保・寛政の頃、度々きびし

く追払ひ、しばしは隠るゝといへども、いつとなく出

きたり、当時国中に充滿す。是によつて此度また

く売出して、その性体を見るに図のごとく、但し

いまだその名をしるものなし。よつて諸書を穿

鑿するに、元三国伝来にして世界万国に渡るゆへ、
「(24・ウ)

所々にて名も違ひあり。まづ天竺にては美々獅子

とも宇都久獅子とも、唐土にては全盛蛇とも五

発蛇とも破理過蛇とも、おらんだにてはユキスギ

ともハダスギともヲゴルキとも、日本にては着カザリ

といふたわけだ物也。形ちに似て人にあらず。頭

に甲有て、べつかうとも、結構ともいふ。また金銀の

ごとく、後光の如く光りかゞやき、身に綾羅錦繡

をまとひ、男は赤毛なし。女は惣身、頭、首筋、ゑ

りもと、脇の下、腰より下、惣じて赤毛多く、紅ちり

めんのごとく、但し紫もあり。色は五いろ、六いろ

に別れて甚いやしき姿也。面はいたつて大きく、

目は上の方に付、常に下を見ず、また向ふをみず、
「(25・オ)

兎角に無ひ袖をふりたがり、瘦臂をはり、十分に手をひ

ろげ、耳をふさぎ、人のいふ事さらに聞ず、やみくもに乗

て有頂天にのぼり、鼻高く、口は常に大平樂をはきち

らし、舌長く、或は式枚あり。まけおしみ強く、人より

上をゆく事を好み、節句前になりて其鳴声うる

さし。元來腹もなく、胸もせまく、穴は深し。腰はふわ

くにて逃足早し。女は足の爪黒く、下駄は金剛の如し。

赤も有、黒きも有て、天我絨の如し。僭上国にては香花、茶

の湯、謡ひ、舞等の遊芸に家業を忘れ、道楽国にて

は朝寐、ひる寐を好み、酒色にふけり、昼夜の

別ちなく、かりそめにも尾を見せず、増長して

身をほろぼす時にいたりて尾を出す。則牛房
「(25・ウ)

の如し。また尾、龍のごとくにて剣なし。是龍劍

なしなどゝといふ。又劍有ばうるこ入らず。是を名付

て不龍劍といふ。
「(26・オ)

注

1、国立公文書館のツイッター公式アカウント

https://twitter.com/JPNatArchives/status/676174888105844736/photo/1?ref_src=twsrc%5Etfw (2017/3/26)

(むらかみ よしあき・本学大学院博士後期課程)